

超高齢化社会

鶴川第二中学校 一年

岩本 透青
いわもと とおあ

ある国は、少子化に悩まされていた。物価の高騰やライフスタイルの変化など、様々な原因が重なり事態はどんどん悪化していった。そこで国は、ある政策を行うことにした。それは3Dプリンターで人間をつくるという政策だった。さらには、3Dプリンターで人間をつくると、国から謝礼金がもらえるとのことだった。一部、反対する人もいたがほとんどの人は少子化の解消を期待し、賛成した。

政策は政府の狙い通り人々に浸透し、すぐに3Dプリンターで多くの人間が作られていった。始めは不安だった人達も、3Dプリンターで作られた人間と本物の人間は、見た目もふるまいもそっくりだったので不安はすぐに消えていった。

3Dプリンターで作られた人間は本物の人間と同じように赤ちゃんから子供、大人へと成長し、学校へ行ったり仕事をしたりした。本物の人間と全く見分けがつかなかった。

「本物の人間」「3Dプリンターで作られた人間」という差は全くなかった。

3Dプリンターで人間をつくったことで少子化は解決し、今まで子供に恵まれなかった人も子供をもつことができて大いに喜んだ。人口が増えたことにより経済も暮らしも安定した。

政策は人口増加だけでなく、他にも良い影響を及ぼした。交通事故や病気による死者が大きく減り、平均寿命が大幅にのびた。理由は明らかにないが、3Dプリンターで作られた人間は、本物の人間よりはるかに丈夫で病気になることもなく、健康そのものだった。それがさらに人気を呼び、始めから3Dプリンターで子供をつくることを希望する夫婦もめずらしくなかった。メリットだらけのこの政策は海外でも真似する国が出始めた。

一番初めに3Dプリンターで作られた人間が百才になる頃、この国は異様な空気で包まれていた。例えば宅配業者の顔はシワだらけで髪もグレーがかった白髪の、見た目はまぎれもなく老人なのに重い荷物を軽々と持ちあげ運んでいた。他にはプロ野球選手に老人のような見た目の選手がいたり、その国に住んでいる人々の半数以上が老人のような見た目のにまるで若者のように軽快で活力を感じる動きをしていた。

この国では、平均寿命という言葉がなくなり、「人は死ぬ」という概念も消えていた。

森村誠一賞
岩本透青「超高齢化社会」

審査員講評

「3Dプリンターで人間をつくると国から謝礼金がもらえる」という、風刺がきいた設定にしました。作られた人間は丈夫で不死身だから完璧かと思いきや、老いという概念は残されたままなのが味わい深いです。年老いたプロ野球選手が活躍している、という表現でこの不思議な世界の情景が浮かびました。

―― 藤岡 みなみ